

公立小学校の「放課後子ども総合プラン」におけるダンス指導について ～児童への影響と今後の課題～

林 夏 木 原田 奈 名 子
(大学院研修者) (教育学科教授)

1. はじめに

1.1. 「放課後子ども総合プラン」の一環である大原小学校「まなび」

平成19年度、文部科学省による全児童を対象とした「放課後子ども教室推進事業」と、厚生労働省による概ね1～3年生の昼間留守家庭児童を対象とした「放課後児童健全育成事業（学童クラブ事業）」の、二つを柱とする「放課後子どもプラン」が創設された^{註1)}。

京都市では平成19年度より、「放課後子ども教室推進事業」の京都市版として、全小学校区で「放課後まなび教室」（以下「まなび」と略す）を実施している。「まなび」は、学校施設を活用し、保護者、地域の方々、学校運営協議会、学生等の協力を得て放課後の子どもたちに、学習の習慣づけを図る「自主的な学びの場」と「安心・安全な居場所」の提供を目的とし、各学校により様々な取り組みを行うものである。

京都市立大原小学校の「まなび」は、平成20年度4月から開始された。対象は、小学1～6年生の「まなび」登録申請を行った児童である。平成25年度から校内施設を利用した学童保育が開始され、学童申請を行う児童は同時に「まなび」登録を行うこととなった。主な活動として、日常的には、保護者と地域の方々の協力得て、多目的室や学童保育室などを利用した宿題と復習のサポート及び素読などである。また、定期的に「茶道教室」、「草木染め教室」、「陶芸教室」などをそれぞれ年数回ずつ開催している。夏季、冬季、春季休業時は、「まなび」も閉鎖される。また、各教室の個々の目的や具体的な内容についての制約は緩く、概ね指導者の判断

に任されている。

「まなび」参加希望の児童は、通常、年度始めに1年間の登録申請を行い、保険料500円を納入する。また、定期的に行っている各教室では、その都度材料費などの経費がかかる場合もある。

1.2. 「まなびダンス教室」について

平成26年度より学童保育スタッフの発案により、「まなび」のひとつのプログラムとして「ダンス教室」が開始された。対象は、平成26年度においては小学1～4年、平成27年度からは1～6年である。大原小学校内の講堂を利用し、原則、月2回、1回1時間である。ただし、他の「まなび」同様、夏季、冬季、春季休業時は閉鎖される。

「まなび」は授業とは違い、参加への強制力はないゆえ参加者数は流動的である。表1に示したように、平成26年度の大原小学校1～6年生の児童数47名のうち「まなび」登録者は37名で、「ダンス教室」に参加した児童の数は、1年を通して15名（女子9名、男子6名）であった。平成27年は全児童数43名のうち、「まなび」登録者が31名で、「ダンス教室」に参加した児童の数は、10月現在で15名（女子12名、男子3名）である。両年度「ダンス教室」参加者数の割合は、のべ全校生徒数に対して約33.7%、のべ「まなび」登録者数に対し44.8%であった。半数弱である理由として、全学年を通し「まなび」終了時の17時に保護者が迎えに来られない家庭があること、また、特に高学年の参加者数が減る理由は、6時間授業後の他の課外活動等

に参加することと推察される。

「ダンス教室」発案者の要望は、「伸び伸びとした大原の子ども達一人ひとりの個性をさらに伸ばすような、自由で解放的なダンスをさせたい」、「ダンス教室をすることによって将来、大原の活性化に寄与する人材を育てたい」であった。そこで筆者は、近年、学校教育目標にも頻繁に掲げられる「みんな違って、みんないい」^{註2)}を多様性への相互理解と捉え、「ダンス教室」をその実践の場と位置づけた。よって、特定のダンススタイル（バレエ、ヒップホップなど）を習得するための練習や鍛錬を含まず、子ども達一人ひとりの個性を尊重し、それぞれが自由に独自のオリジナルダンスを安心して披露できる内容構成と雰囲気作りを試みることにした。これは、松本（1992）が指摘するダンスの「内包された情動」のうち特に「内面性と創造性」及び「自己開発の宴—自分らしく、生きるため」にフォーカスしたといえよう。松本はまた、太鼓の音色とリズムは、「私たちの身体をじっとはさせておかない。いてもたってもいられないような（筆者中略）衝動」を起こすもの、と表現している。この「衝動」を最大限引き出すために、打楽器奏者1～3名に演奏を依頼し、生演奏の太鼓でリズムダンス^{註3)}を行うことにした。ただし、年間に4～5回デジタルプレーヤー^{註4)}用いたことがある。

内容は大きく分けて、5分の休憩を含む60分間の5構成にした（表2）。また、大原伝統の「八朔祭」の時期には、伝統踊り（道念踊り）も取り入れることとした。

指導法で配慮したことは以下の2点である。

- ①ステップや振付練習をできる限り行わない。行き詰まっている様子が見えた時には、新しい動き方を提案する。
- ②子ども達から生まれる発想や動き方を面白がり、褒める。なお、当時テレビで見た流行のダンス、たとえば、妖怪体操やお笑いタレントのダンスを真似して行った際には、多少取り入れることはよいが、すべてを真似て行うことは避けるよう伝える。

日常の活動以外、平成26年度5月より地域イベント等に招かれ、子ども達は多数の観客の前で自分達のダンスを披露する機会を得た（表3）。イベントは、非日常空間において生を発現させ、他者に向け自己を表現する経験であると同時に、地域との繋がりを生む機会になると考えてのことである。

以上を踏まえ、本研究は以下のことが目的である。①大原小学校の「まなび」における「ダンス教室」を1年半継続した現在、子ども達の受け止めや保護者の感慨を明らかにすると共に、②今後、「まなび」における「ダンス教室」の望ましいあり方に示唆を得ること。

2. 研究方法

児童と保護者対象に半構造的インタビューを実施した（表4）。対象を、2ヶ月から1年半継続した「継続群A」、1回参加して不参加になった「途中不参加群B」、参加と不参加を繰り返した「出入り群C」に分類した。継続の要因を探るべく対象群毎に質問を変えている。

表1 全校児童数, 「まなび」登録者数, 「ダンス教室」参加者数

	大原小 全児童数	女子		男子		1年	2年	3年	4年	5年	6年
		女子	男子	女・男	女・男	女・男	女・男	女・男	女・男	女・男	
平成26年度	47	20	27	3・2	3・6	5・2	3・5	2・5	4・7		
まなび登録者数	37	17	20	3・3	3・6	5・3	1・4	2・1	3・3		
ダンス参加者数	15	9	6	3・1	3・4	3・0	0・1	—	—		
平成27年度	43	21	22	4・2	3・2	4・6	5・2	3・5	2・5		
まなび登録者数	31	16	15	4・2	3・2	4・6	5・0	1・4	0・1		
ダンス参加者数	15	12	3	4・0	2・0	4・2	2・0	0・1	0・0		

表2 プログラム内容と構成

①ウォームアップ	約5分	太鼓に合わせて、「走る」「スキップする」「いくつかのステップを踏む」をしながら講室内をぐるぐると回る。その後、中央に集合しストレッチを行う。
②リズム遊び ボディパーカッション	約10分	手拍子、足踏み、腿を手で叩くなど体で音を出したり、シェーカーなどの打楽器を用い、様々なリズムを体験する。
③ストーリーダンス	約20分	2～3人のグループに分かれてストーリーを考え、ダンスで表現する。
④まねっこしりとり ダンス	約10分	円になり、前の人が行ったダンスを8～16カウント真似、その後、自分のダンスを8～16カウント行う。次の人がまたそれを真似、自分のダンスを行う。カウントと交代の指示出しは指導者が行う。
⑤円で行う サンバ・ジ・ホーダ	約10分	円になり、サンバのリズムに合わせて、一人ずつ交代で中央に出てきて、自分の独創的ダンスを披露する。全員が一人ずつ踊った後、全員一緒にそれぞれが独創的ダンスを踊り、最後は合図に合わせてポーズする。

表3 イベント参加実績

①	平成26年	5月	大原野祭 vol. 2	大原の人気カフェの定期イベント
②		6月	大原子育て支援施設お披露目会	京都市職員及び他校の教員に報告する会
③		10月	左京朝カフェ	左京区役所地域力推進室主催の定期イベント
④		11月	大原野祭 vol. 4	大原の人気カフェの定期イベント
⑤		12月	私の好きな木/小室等コンサート	京都市理科研究会他多数主催のコンサート
⑥	平成27年	8月	大原老人会イベント	大原在住の70歳以上を対象にした定期イベント

表4 インタビュー内容

〈A＝継続群〉 児童 9名 (女子7名, 男子2名)	〈B＝途中不参加群〉 児童 3名 (女子0名, 男子3名)	〈C＝出入り群〉 児童 2名 (女子0名, 男子2名)
1) 年齢と学年	1) 年齢と学年	1) 年齢と学年
2) ダンスのどんなところが好きか	2) 「ダンス教室」の感想	2) ダンスは好きか, 楽しいか
3) 踊っている時はどんな気持ちか	3) 不参加になった理由	3) 不参加理由と再び参加した理由
4) ダンスを習い始めてなにか自分が変わったことはあるか	4) どんなダンスをしてみたいか	4) 今後, どのような内容だったから継続して参加するか
5) これからどんなダンスをしたいか		
保護者 8名	保護者 2名	保護者 2名
1) 「ダンス教室」参加前のダンス経験の有無, ダンスへの興味や習うことへの自訴の有無	1) 「ダンス教室」参加前のダンス経験の有無, ダンスへの興味や習うことへの自訴の有無	1) 「ダンス教室」参加前のダンス経験の有無, ダンスへの興味や習うことへの自訴の有無
2) 「ダンス教室」をはじめから, なにかしら変化があれば	2) 「ダンス教室」参加直後の児童の感想と, 不参加の考えられる理由	2) 「ダンス教室」参加直後の児童の感想と, 不参加の考えられる理由
3) 今後, ダンスを通して習得して欲しいこと, 期待すること, 特にやって欲しいダンスはあるか	3) ダンスをして欲しいか, するとしたらどんなダンスか, ダンスよりして欲しいことがあるか	3) ダンスをして欲しいか, するとしたらどんなダンスか, ダンスよりして欲しいことがあるか

3. 結果と考察

3.1. 継続群A

7歳（小1）から10歳（小5）の女兒7名、男児2名の計9名の児童とその保護者8名である。継続期間は2ヶ月から1年半である。

① 児童について

「ダンスのどんなところが好きか」に対し、9名中6名が「自由に踊れる」「フリーダンスで思いっきり踊れる」を挙げ、他には「タイコに合わせてみんなで踊る」、「かっこいいサンバが好き」「全部好き」であった。講師や他の児童の動きを真似て踊ることより、自由に踊ることや仲間と一緒に踊ることが好きとまとめられる。

「踊っている時はどんな気持ちか」に対し、「のびのびする」「ドキドキする」「ワクワクする」「気持ちいい」「スッキリする」であった。一方「ちょっと恥ずかしい」「知らない人が見ていたら恥ずかしい」も2名見られた。このように、大半が肯定的であったが、羞恥心への言及もみられる。

「ダンスをはじめてなにか自分が変わったことはあるか」に対し、「もっと踊れる気がするようになった」「もっと続けてみようと思うようになった」「自信がついた」や「前よりダンスの動画を見ると楽しくなった」「前よりお父さんにダンスの動画を見せてもらうようになった」の一方、「特にない」も2名みられた。概ね、踊ることと同時に自信の向上もうかがわれる。

「これからどんなダンスをしたいか」に対し、「ヒップホップ」「サンバ」「フリーダンス」「民族舞踊」を挙げると同時に、「Hちゃんみたいに恥ずかしがらずに自由に踊れるようになりたい」も1名見られた。特定のダンススタイルへの志向が見受けられ、個人差が大きいとまとめられる。

② 保護者について

『「ダンス教室」参加前のダンス経験の有無、ダンスへの興味や習うことへの自訴の有無』に対し、「保育園や幼児施設でのリトミック経験がある」児童は3名、それ以外の児童は特にダ

ンスの体験はなかった。継続群Aの児童9名に共通して「幼少期、ほぼ立ち始めると同時に、音楽に合わせて体を揺らしたり踊ったり自ら自然に踊り始めた」であった。また、小学校入学前後に、ダンス教室への参加を要望した児童が4名いた。

「ダンスをはじめてから、なにかしら変化があれば。」に対し、「家で習ったステップを見せてくれるようになった」「お父さんにダンスの動画を見せてもらうようになった」「ダンス教室のお迎えに行くと、帰りの車の中で踊りを見せてくれる」であり、また、「以前よりテレビを見ながら踊る頻度が増えた」「自分から音楽をかけて一人で踊るようになった」であった。ダンスを通して保護者とのコミュニケーションがうかがえる。他には、「前より活発になった」「人見知りが減った」「社交的になった」「自信がついた」であった。ほぼ全員が精神面での肯定的な変化について言及した。

「今後、ダンスを通して習得して欲しいこと、ダンス経験を通して期待すること。」に対し、「もっと自分に自信をつけて、堂々と自己表現できるようになって欲しい」が3名、一方、「特にない」「いまのままでよい」が4名だった。また「姿勢矯正、体力の向上、楽しむこと」が1名いた。

「特にやって欲しいダンスがあれば。」に対し、「ヒップホップ」「サンバ」「バレエ」「アイドル系ダンス」など具体的に挙げる保護者と、「特にない。自分がしたいダンスをして欲しい」という保護者は、ほぼ半々であった。

③ 継続群女兒7名、男児2名の特徴

児童は幼少期から、音楽が聞こえてくると自然に踊りだしたり体でリズムを取ったりなど、元来踊ることに対し、親しみを持っていたと考えられる。そして、全体として「自由に踊れること」を何より好む傾向が見られた。踊っている時の気持ち及びダンスを始めてからの自分の変化を概ね肯定的に捉えていることや、今後のダンスとの関わりに積極性が見られることから、元来ダンス好きな児童が、「ダンス教室」を継続する傾向があるとまとめられる。

3.2. 途中不参加群B

1回参加した後に不参加になった8歳(小2)の男児1名と11歳(小4)の男児2名,計3名とその保護者2名であった。

① 児童について

『ダンス教室』の感想)に対し、「踊ったのは踊ったけどちょっと面白くなかった」「動きが激しくて疲れた」が2名、「汗をかいた」が1名だった。一方、「友達と一緒にだったのが楽しかった」「ボディパーカッションは楽しかった」もあった。「不参加になった理由」に対して、「面白くないから」「恥ずかしかった」「女子が多いから」などを挙げた。つまり、特定の出来事や内容を楽しく感じたが、継続したいと思わせるには至らなかったとまとめられる。

「ダンスは好きか、どんなダンスならしてみたいか」に対し、「文化祭でTくんがやっていた踊り(携帯のテレビCMで流れるアメリカのポップミュージックに合わせたアイドル系ダンス)みたいのがやりたい」「ダンスは好きだけど、お笑い系のダンスだけやりたい」「ダンスより剣道がやりたいけど、リズムに合わせた剣道ならやる」や、「Sくんが行くなら行く」であった。

② 保護者について

『ダンス教室』参加前のダンス経験の有無、ダンスへの興味や習うことへの自訴の有無)に対して、3名のうち2名は、「小さい頃から音楽が聞こえてくると自然に体を動かし、リズムを取っていた」であり、剣道が好きな1名は「小さい時から全く踊る様子はなかった。」であった。3名共ダンス経験はなく、ダンス教室に通いたいなどの要望もなかった。

『ダンス教室』に参加直後の感想と、その後、不参加の考えられる理由)に対して、3名共帰宅後、「楽しかった」「結構面白かった」と述べていた。不参加になった理由として、「単に人前で踊ることが恥ずかしかったのでは」「自分がしたいダンスと違うから」「女の子が多いことで恥ずかしかったのでは」と推測していた。

「ダンスをして欲しいか、するとしたらどん

なダンスか、ダンスよりして欲しいことがあるか)に対して、2名共「基本的に本人達的意思に任せる」であった。ダンスよりして欲しいことなども特になく、あくまで児童の好みや意思を尊重していることが明らかである。

③ 途中不参加群男児3名の特徴

2名が、幼少期から自然と踊ったり体でリズムを取ったりしており、ダンスは好きとまとめられる。初回参加後、3名共「楽しかった」と保護者に伝えていたが継続しなかった。それは、特定のダンススタイルへの思い入れがあり、提供した内容が合わなかったとまとめられよう。不参加になった理由として保護者は、多数の女子の中で踊ることへの「気恥ずかしさ」を挙げていた。しかし初回参加時は女児7名、男児6名とほぼ半数だったことを考えると、やはり内容の不一致が不継続の原因と推察される。

3.3. 出入り群C

1年半の間に参加不参加を繰り返す9歳(小3)の男児2名とその保護者2名であった。

① 児童について

「ダンスは好きか嫌いか、楽しいか楽しくないか)に対して、2名共「ダンスは好き」で「楽しい」であった。

「不参加の理由と再び参加した理由)に対して、1名は「(ダンスには参加せず時々見学に来る)Hくんと一緒に見学をしてみたかった。けれど、やっぱりダンスの方が楽しそうだなと思ってまた参加した」であり、もう1名は不参加の理由は話さず、再び参加した理由は「楽しそうだったから」であった。

「今後どのような内容だったら継続して参加するか)に対して、1名は「フリーダンス」と答え、もう1名の男児は「お笑い系のダンスとか、棒を持って戦うような踊りならやりたい」であった。

② 保護者について

『ダンス教室』参加前のダンス経験の有無、ダンスへの興味や習うことへの自訴の有無)に対して、2名共小学校入学前にリトミックを経験していた。1名は「小さい時から音楽が聞こ

えると自然とダンスをしていた」であり、もう1名は「小さい時に踊っているのは見なかった。どちらかというと棒を持って戦うのが好きだった」である。

『ダンス教室』参加直後の児童の感想と、その後、参加不参加の考えられる理由」に対し、2名共、ダンス直後は「楽しかった」と保護者に伝えていた。その後不参加になった理由として、1名は「お友達から『ダンス下手クソ』と言われたことで一旦やめた。しばらくお休みしたが、担任の先生に『ダンスはやった方がいいよ』と言われたのがきっかけでまた始めた」であった。もう1名は、触ってはいけないと言われていたデジタルオーディオを触って床に落としたことで、ダンス講師（筆者）から怒られ、「そのことがきっかけで一旦やめた。その後、仲良しの友人が参加するようになり再び参加するようになった。その後、自分の好きなダンス（棒を持って踊る戦いのダンス）が続いたので、楽しく通っていた」と述べた。

「ダンスをして欲しいか、するとしたらどんなダンスか、ダンスよりして欲しいことがあるか」に対して、2名共「ダンスはして欲しい」であった。その理由として1名は「自分が全くダンスに縁遠いので、子どもはダンスができて発表もできたらいいと思う。人として感じることも養って欲しい」であり、もう1名は「未熟児で体も弱かったので、これから体力をしっかりつけて行って欲しい、その為にもダンスはよいと思うから」であった。2名とも、特にして欲しいダンスや、ダンスよりして欲しいことはなかった。

② 出入り群男児2名の特徴

幼少期から自然と踊りだしていたが、一度不参加になったのは、「下手クソ」と言われたり、講師に怒られたりと否定的な出来事がきっかけであった。再び参加したのは「楽しそう」に思えたからであり、特に「フリーダンスが好き」という1名は、否定的な出来事が起こらなければ続ける可能は高いように思われる。「棒を使った戦いのダンスが好き」というもう1名は、この特定のダンスに強い興味を示す様子から、

内容次第で継続の可能性があるともみることができる。

4. まとめ

4.1. 体験の質

「ダンス教室」参加不参加の主な理由は次のようにまとめられる。「まなび」は、自由参加型の課外活動である。よって、ダンスに興味のない児童は参加しない。また1度参加しても「自分のニーズに合わない」や人間関係の不和などの理由によって、容易に不参加になる傾向が見られる。元来ダンス好きな児童は、「自由ダンス」という内容の面白さに加え、良好な人間関係が続き、総合的に「楽しい」と判断したゆえ継続したとまとめられる。

いずれの群の保護者も、ダンスに対して、また児童の「ダンス教室」参加に対しても、肯定的に捉えているといえた。継続群Aの保護者の多くが、ダンスによって「自分に自信をつけて、人前でもはっきり意見を言い、自己表現できるようになること」を挙げていることから、このようなダンスの教育的価値が明らかになった。さらに、A群の保護者は不参加経験を持つB・C群の保護者より、児童がダンスを続けることに対する熱意や期待がより大きいと判断された。

さて、目標である「多様性への相互理解の実践の場」の達成についてである。継続群Aの児童が、「フリーダンス」を好み、それぞれが「自分の踊り」を表現している状況、言い換えれば、明らかに「みんな違うダンスを踊っている」多様な状況に、心地良さを感じていると言えよう。

よって、多様性の相互理解の実践の場として、参加継続している児童に関しては、ほぼ達成できているものと思われた。

「ダンス教室」が始まり1年半が経過した現在、男子参加者がゼロになった。それは、男子が興味を持って取り組める内容ではなかったと判断された。また、「まなび」登録者のうち「ダンス教室」に一度も足を運んだことのない児童が約半数強みられることから、「ダンス教室」は、ある特定の児童、つまり「元来ダンス

好きな女子」に好まれる内容構成であったと言える。

4.2. 「まなび」の「ダンス教室」の望ましいあり方とは？

「まなび」登録者のほぼ半数が「ダンス教室」継続し、自由に伸び伸びとしたダンスを毎回楽しんでいる点において、発案者と講師の目的である「伸び伸びとした子どもの育成」は達成されてきたと言えるであろう。しかし一方で、「放課後子ども総合プラン」の設立目的から、約半数の不参加児童の参加を促す必要があると考える。解決策として、不参加児童のニーズを探り、それに対応したプログラムを提供することが挙げられる。たとえば、学期毎に内容を示し、参加したい内容の日に児童が気楽に参加できるようにする。具体的には、自由に思いっきり踊る「フリーダンスの日」以外に、「ヒップホップダンスの日」、地域に伝わる「伝統踊り、盆踊りを踊る日」、運動会前には「京炎そでふれ^{註5)}練習の日」、男子児童向けの「戦いのダンスの日」などである。ダンス講師が教えられない内容については、随時、保護者や地域の方々のボランティアを事前に募り、ゲスト講師として指導を依頼することも視野に入れる。

今回の調査結果により、「ダンス教室」は特定の児童においてはその目的を十分に達成してきたと言える。しかし今後、より多くの児童の

「ダンス教室」への参加を促すためには、ニーズに合わせた多様なプログラムを提供することが一策と思われる。さらなるフィールドワークと調査研究を重ね、「まなび」における「ダンス教室」の望ましいあり方を検討する必要があるが見出せた。

註

- 註1) 平成26年度より「放課後子ども総合プラン」に名称変更された。
- 註2) さいたま市立大砂土小学校、川越市中央小学校、鴻巣市立吹上小学校、小諸市立坂の上小学校、大阪狭山市立東小学校など。
- 註3) リズムダンスの文部科学省による定義は、「リズムに乗って、弾む・スキップ・ねじる・回るなどの動きを組み合わせる。また動きにアクセントを付けたりリズムの変化も付けたりする。中略。友達と自由に関わりあって踊ることも大切」である。
- 註4) デジタルプレーヤーとは、携帯が可能なデジタル音楽ファイルの再生可能オーディオプレーヤーを指す。
- 註5) 平成17年から始まった京都の祭踊りの呼称で、高知のよさこいのような踊りのジャンルを指す。平成20年以来、大原小学校の運動会で全校生徒によって毎年踊られている。

文 献

- 松本千代栄 (1992) : ダンスの教育学1, 徳間書店. : 13~20
- 原田奈々子 (2005) : 評価の視点から授業を構築するーダンスの授業を例にー, 体育科教育 2005年7月号, 大修館書店 : 28-31